

アユのはなし

水産研究所では、平成25年2月13日に今年度のアユ種苗生産が終了した。

毎年、アユの種苗生産が始まると秋の訪れを感じてきた。暑さがまだ残る9月27日に採卵した卵は、シュロで作られたブラシに付着させ、当所まで搬入し、水槽に収容した。卵は、約10日間管理した後、ふ化が始まる。（写真1）

卵の管理は淡水だが、ふ化が終了すると海水を注ぎ、数日間かけて海水に換える。その後は海水で飼育を継続する。

アユは川に棲んでいる魚なので淡水で飼うものと思われるかもしれないが、川でふ化した仔魚は、ふ化後数時間のうちに海に流れ着き、そこでプランクトンを食べ、大きく育つ。

この自然の状態を水槽内で再現し、淡水から海水に置き換え仔魚を飼育する。実際の飼育では、ふ化直後の餌は培養したシオミズツボムシやアルテミアと言う動物プランクトンで、その後配合飼料を与える。こうして、約100日程度かけておよそ5センチまで大きくしたアユの稚魚は、川で過ごすことができるよう、ふ化したときとは逆に、数日間かけて、徐々に淡水に馴らしてゆき、県内の漁業協同組合に中間育成用の稚魚として出荷する。（写真2）

漁業協同組合は、5月の連休明けまで中間育成し、アユを県内の各河川に放流する。放流された若アユは河川のこけを食べて急速に成長し、解禁日には太公望を喜ばせることとなる。（写真3）

（資源増殖室：杉野）



写真1 卵の中のアユ（直径約1mm）



写真2 飼育中の稚魚（全長約40mm）



写真3 若アユ